

—文化の薫る活力ある地域づくりをめざして— 財団では、このような事業を行っています。

### 普及啓発事業

1. 財団ニュース「作州路」27号の発行
2. 普及講座の開催  
【今年度は無し】
3. 事業協賛に伴うPR活動  
「金時祭花火大会」への協賛  
【花火大会の規模縮小により協賛事業は無し】

### 芸術文化活動事業

#### 【主催事業】

##### ■公募展の開催

- 第20回ミマサカコドモ絵画展  
会期/令和6年1月6日(土)  
～令和6年1月28日(日)  
会場/勝央美術文学館  
展示室・町民ギャラリー1・2



「ミマサカコドモ絵画展」会場風景

##### ■公演の開催

- 「夏を彩る 津軽三味線コンサート」  
とき/令和5年8月6日(日)  
会場/勝央文化ホール



「夏を彩る 津軽三味線コンサート」チラシ

#### 【共催事業】

##### ■企画展の開催

- 《文学》
- 小企画42「文士たちの交友録」
- 小企画43「青蛙堂の夕べ」
- 《美術》
- コレクション展 vol.45  
郷土の画家シリーズ「垂直降下(ヘルダイヴ)」
- コレクション展 vol.46  
郷土の画家シリーズ「素描と淡彩XI」



「綺堂生誕祭」チラシ

##### ■イベントの開催

- 「綺堂生誕祭」  
とき/令和5年10月15日(日)  
会場/勝央美術文学館

#### 【助成事業】

- 芸術文化活動助成
- 勝央金時太鼓保存会活動
- 勝央町文化協会活動事業
- 勝間田焼復活会普及活動「七輪風窯」

#### 【後援事業】

- 福島青衣子&森岡有裕子  
ハーブ・フルートコンサート
- 親子のためのクラシックコンサート  
音楽の絵本
- 勝央美術文学館プレオープン20周年記念  
プロジェクト  
紙ニケーション COCHAE20周年記念展
- 北海道歌旅座 ザ★コンサート 2023
- 組踊 特別鑑賞会
- 公共ホール音楽活性化支援事業  
アーバンサクソフォンカルテットコンサート
- プロジェクトマッピングコンサート
- 赤堀佐兵生誕120年記念展  
赤堀佐兵と独立美術協会の画家たち

#### その他の事業

1. 文化財資料収集保存事業
2. 学術的研究及び図書の発刊事業への  
助成事業を継続しておこなっております。

### 地域の文化活動を応援します！

地域芸術文化振興のための助成活動を実施しております。詳しい内容は、財団事務局へお尋ねください。

### 当財団への皆様のご寄付を お待ちしております！

当財団への皆様のご寄付は、地域文化事業の実施に役立てられています。  
ご寄付をいただいた皆様は、税額控除をうけることができます。

### 表紙について【文学者 木村毅が郷土に遺した足跡】

勝央町には木村毅の足跡が現在も遺っている。成立に尽力したノースロップの森に木村毅文学碑、そして生家である。毅の生家は、勝間田高校正面を東に進み、現在の勝間田保育園と道を隔てて反対に位置している。往時の写真や、勝央美術文学館所蔵の鷺田重郎「木村毅生家」(1984)と見比べると茅葺きだった屋根はすげ替えられ、軒の形も異なるなど、その姿は時代と共に移り変わっていったことが窺える。毅はこの作北の大地を魂のプランクとして、後の飛躍に繋げた。奇しくも彼の生家の直ぐ側には無限の可能性を持つ子どもたちがその萌芽の時を迎えようとしている。毅に続くような偉人が、生まれ出ることを期待して文章の締めとしたい。



現在の木村毅生家(勝央町岡)  
2024年2月 勝央美術文学館撮影

### 編集後記

本文連載「出雲街道宿場考」に登場する 文学者 木村毅(きむら・き 1894-1979)は、岡山県勝南郡勝間田村(現勝田郡勝央町)に生まれました。少年時代から文士を志し『少年世界』『文章世界』に投稿。高等小学校卒業後は苦学して早稲田大学英文科に入学。大正14年刊行の『小説研究十六講』は当時ベストセラーとなり後に松本清張が作家を志すきっかけとなりました。今回は、作州が生んだ偉大な文筆家の意外な姿をご紹介します。(E.N)

## 公益財団法人 美作学術文化振興財団





# 木村毅生誕 130 年 郷土と、たべものと、三人の兄と

勝央美術文学館 学芸員 佐古健太郎



令和 6 年、勝央町出身の文学者木村毅（きむら・き）が生誕 130 年を迎える。今も勝央町役場敷地に佇む木村毅文学碑に刻まれた「雑草の実のように芽ばえた蛙の子のようにとびはねた作北の山河に絶景はないがわしらの幼い魂のブランコとしては十分だった」の字句が語るように、編集、大衆文学、ジャーナリズム、歴史研究、文芸評論、政治等多岐にわたる分野で活躍したバイタリティの根幹には作北の地で育った若き日々がある。また毅には三人の兄がいたが、三者三様の形で彼の生涯に大きな影響を与えており、関連するエピソードが遺されている。このたびは、その中から、「たべもの」にまつわるものを紹介したい。

## 1. バナナが繋いだ縁

令和 6 年、岡山県は国土緑化運動の中心的行事である「全国植樹祭」の開催県として、各所で行事が予定されており、併せて県の歴史・文化など数多くの魅力を全国に発信している。勝央町にも植樹運動に由来する植林地として「アーバー・デー（木を植える日）」の提唱者 B・G・ノースロップ博士の名前を冠する「ノースロップの森」が存在する。この地の制定に関わったのが木村毅であった。

「ノースロップの森」のアイデアは、勝間田小学校創立百周年記念事業実行委員会の会長を務めていた木村増夫に毅が推薦したもので、昭和 48 年に同事業の一環として創設された。

毅は小学校に入学した頃、勝間田村の村長をしていた父木村彙（本名：あつむ、通称：しげし）が学校にクスノキの苗木を寄付したことや教科書にも木を植える話が出るようになったことを覚えており、ドングリでコマを作って遊んでいた際に教師から荒地や山にそのドングリを植えると立派な木に成長することを教えられたことも記憶していた。

これらの出来事は、来日したノースロップ博士が、学童による植樹の方法を明治政府に提言し、それによって日本の植樹運動が発展して国土緑化の嚆矢となった結果であり、折しも高度経済成長期を経て公害や環境破壊が叫ばれる昭和 40 年代の世相は、アメリカ開拓期の森林破壊による環境破壊の弊害で自然災害が頻発し、この対策のためノースロップ博士が植樹活動を行い始めたシチュエーションに似ていた。

これらの問題の克服には植樹による樹木の活用と自然破壊の過ちを繰り返さないよう児童の教育に盛り込むこと以外には考えられないと確信した毅は、とある人物に協力を仰ぐこととした。

場面が変わって、毅が桃山学院への中学受験のため、大阪にいた長兄 木村快太のもとに身を寄せていた時のことである。兄は教員であったため、教えずで女学校を卒業し

たばかりの女性が諸々の相談のために兄の家を訪れることがあった。ある日、兄に頼まれ相談を終えた女性を駅まで送った毅はお礼にと、その女性から道中の青物屋で生まれて初めてバナナを買ってもらい、そのねっとりとした異国の甘さに驚いた。

後に毅は、この女性が若くして亡くなったことを聞いていたが、三十年経ってからその女性の弟と呼ばれる人物に巡り合い、親交を結ぶようになった。その人物が久我商会（現（株）久我）の社長 久我俊一であった。久我は材木商として関西財界で名が知られていると同時に、熱心な全国植樹運動の指導者であり、毅の進言でノースロップ博士の功績についても掘り起こし顕彰活動を行っている。久我也「ノースロップの森」のアイデアに賛同し、もう一人の立役者として「ノースロップの森」の設立に尽力している。

毅には、子どもが見て楽しめ、実を拾うことを喜ぶ木を植えたいという一考があり、山桜、フクラシヤカヤ、栗の他にドングリの成るアベマキや榎の木を推薦している。また設立から数年間は「ノースロップの森」の行く末を特に案じており、木村増夫宛に「ノースロップの森」の近況を尋ねる書簡を何度も送っていたことから、その情熱の具合が窺えよう。その甲斐もあって、岡地区から平地区にかけて広がるノースロップの森は、現在もその生命の息吹を我々に届けてくれるのである。バナナが繋いだ縁は長きに亘り、久我は昭和 52 年の木村毅文学碑除幕式にも友人代表として参列している。



木村毅文学碑（勝央町役場敷地内）

## 2. トマトとその食べ方

木村家では、当時としては珍しい作物類が栽培されていた。これは先述した木村毅の父 木村彙が勝間田高校の前身にあたる作東義塾を運営していた関係で、先進的な物を積極的に取り入れようとしていたためである。尋常小学校四年生だった毅は、村で初めて種からトマトを育てることになった。

作物の名前が「西洋なす」とであると聞かされていた毅は、

庭先のさつまいも床を利用して二、三十の芽を発芽させ、それを間引いて二本の西洋なす木を育成することを決めた。従来のなすとは異なる特徴に感心しながら丹精を込めて育てたところ、段々に実が巾着形に膨らみ、そこから二ヶ月程熟するのを待つと鮮やかな赤色の実が存在感を放つようになっていた。

毅はある朝、もういいだろうと実を一つ千切ってみることにした。ところが赤々と膨らんだ実を手にとって本能的に鼻孔に近づけたところ、今まで嗅いだことの無かった独特の香りが彼を襲った。驚いた毅は思わずその実を地面に投げ捨ててしまったのであった。

後日、三兄である木村省三が帰省した折に庭先の西洋なす木を見て、自分も神戸の青物屋の店先に並んでいた物を柿と勘違いして買って食べたところ、想像した味と違ったため吐き出してしまったことを語っている。当時の日本人には、まだその匂いも味も馴染まなかったことが窺えよう。早稲田の学生で知識人と思われた省三が食べられるものではないというのだから、一体この野菜を西洋人はどうやって食しているのだろうかと毅は大いに疑問に思うようになっていた。毅の母親である木村きくは食べ物を捨てるのには忍びなかったため、食べるための工夫としてこれを糠味噌に漬け、一人で処理している。その様子を見ていた毅にとって、曲がりなりにもなすと名前が付く野菜が調理もせず生で食べられるものであるということは考え付かなかったのだった。

毅は六年後の明治 43 年に上京し、それから数年後に立ち寄った洋食屋で、主菜の付け合わせのサラダとして皿に乗せられた紙のように薄く切られた西洋なすと対峙した。「西洋なすとは珍しいな。これはこうして食べるのか」と発言したところ、同行していた中村白葉に窘められ、そこで初めて「トマト」という名前を教えられたのであった。

毅は以来その味に慣れ、トマトを貪食するようになった。尤もその食べ方は皮をむいて、食塩を振り掛けるというものであり、イギリス留学の折にもこの食べ方を実践していた。すると隣の女学生がその様子を不審がり、「日本人はトマトの皮を捨てるのですか。私たちはそれを歯でかみ切ることが好きですのに」と指摘されて初めてトマトは皮ごと食べるものであることを知ったのであった。トマトと巡り合ってから二十五年目にしてようやく食べ方を理解したことを、毅は「トマトが初めて村へ来た頃」という題で随筆にしたためている。



作東義塾に掲げられていた校名板（県立勝間田高等学校歴史資料室所蔵）

## 3. 珍果と勘違い

第一次世界大戦の頃、シンガポールでゴム園を経営していた次兄の木村静雄（アムステルダムオリンピックの背泳選手で後にスポーツ記者として活躍した木村象雷（しょうらい）の父）が珍しい果樹の苗を持ち帰り、木村毅の生家

に植えた。数年後、果樹は育ち実がなり出したが、その間の昭和 2 年に静雄が府尹（府の長官）を務めていた朝鮮の地で事故死したため、この果物の名前は誰にも分からず仕舞いであった。その後しばらくの時を経て、毅が太平洋戦争でフィリピンに従軍し、当地の果物に食べ慣れて久し振りに生家へ戻った時のことである。ちょうど件の果物が熟していたので、これを口にしたい毅は、直ぐにマンゴーを連想した。

熱帯果物のマンゴーが岡山県の北部という熱帯には程遠い場所で生育していることに驚いた毅は、この一件を随筆に記して新聞に寄稿した。すると各所から反響があり、方々の熱心な果樹園家が一体どのように育てたのかと不思議がって、生家へ視察に来る事態になったと家を継いでいた弟の木村幹父から知らせがあった。毅はその狂乱模様も記事にして報知新聞などに寄せている。

ここで終われば不思議な話で終わるのであるが、実はこの果樹の正体が、マンゴーではなくポポーだったのである。ポポーも珍しい果樹ではあるが、本州では幅広く栽培可能なものであったため、この騒動の熱は急激に冷めてしまったのであった。

毅の悪癖の一つに思い込んだら一直線に突き進むというものがあり（もちろん長所でもあり、数多くの発見は彼のこの資質に由来する）、本件は彼の勘違いに実家が巻き込まれたものであった。代わる代わるやって来る果樹園家の人に説明をすることが大変であったと、毅の姪である木村靖子さんは伝え聞いている。このポポーの木は、後年に親族の手によって接ぎ木され、現在も生家の敷地に在る。



木村毅生家にある樹木 垂直に伸びているのが接ぎ木されたポポーの幹

## 4. 各種資料

- 木村毅書簡木村増夫宛 昭和 48.11.10
- 木村毅『南京豆の袋 木村毅随筆集』昭和 13.9.7、第一出版社刊
- 木村毅『夕閑帖』昭和 26.4.30、新潟日報社刊
- B.G. ノースロップ『植樹祭』昭和 46.7.1、久我俊一刊
- 久我俊一『緑化恩人ノースロップ博士』昭和 46.4.1、木材市売時報社刊
- 木村毅『私の文学回顧録』昭和 54.9.20、青蛙房刊
- 木村泰二「ノースロップの森」平成 24.3

### 木村家略系図

